

そよかぜ通信

●巻頭言

**科学的な見方や考え方の
基礎をはぐくむ生活科**

～理科につなげる～

国士館大学体育学部子どもスポーツ教育学科教授
藤井 千恵子

**地域から学び、地域とつながる
総合的な学習の展開**

岩手大学教育学部准教授
田代 高章

**「水」の総合学習から生まれた
新しい学力**

—知識活用能力(リテラシー)を伸ばす授業の工夫—

神奈川県相模原市立鶴の台小学校長
(前相模原市立宮上小学校長)
金山 光一



平成23年版
教科書の紹介
**はじめまして
新しい
教科書です**



科学的な見方や考え方の基礎をはぐくむ生活科 ~理科につなげる~

国士舘大学体育学部こどもスポーツ教育学科教授

藤井 千恵子

学習指導要領の改訂にあたり「中学年以降の理科の学習を視野に入れて、児童が自然の不思議さや面白さを実感するよう、遊びを工夫したり遊びに使うものを工夫して作ったりする学習活動を充実する。」⁽¹⁾ことが指摘されている。

生活科で学習したことが中学年以降の理科の学習につながり、子ども自らが関係付けや意味付けをしていくことができるよう、教師は意図的に「つなげる」視点をもって指導することが求められる。

■ 第2学年「みんなであそぼう」の実践から⁽²⁾

この授業では、「身近にある物を利用して、みんなで楽しく遊ぶ物を工夫して作り、遊び方を工夫できる」という単元の目標を設定している。数種類の遊ぶ物が作られていたが、ゴムで動くおもちゃとして「的当て・スピードカー・飛行機やストロー矢」、風で動くおもちゃとして「帆かけ車」などにも取り組んでいた。これらは、第3学年で学習する理科の「風やゴムの働き」につながる活動である。学習指導案には次のような子どもたちの気づきが記されていた。

- A児 風を受ける物をちがう物にしたらすごく走った。
- B児 ほの大きさを変えてみたら前より早く進みました。
- C児 あおぐのを強くしたらたくさん進みました。
- D児 足をまげてゴムを長く引っ張って当ててみたら上手に当たりました。

E児 輪ゴムを太い物にかえたら遠くに早く飛びました。

これらの記録からは、子どもが風を上手に受け止める工夫やゴムの働きをうまく活用しようとする工夫がみられる。

教師は、遊びの中に潜む科学的な見方・考え方として、例えば「比較する」ことを取り上げ「太い輪ゴムと細い輪ゴム、引っ張り方の長短、帆かけ車の帆の大きさや形の違い」などを意識した言葉かけをする。子どもが何気なく発した言葉（気づき）に意味をもたせるのは教師の重要な役割である。子どもが科学的な見方や考え方に気付いても教師が意味付けたり、関係付けたりしないと学び（気づき）につなげることができない。

教師には、子どもから「このように工夫したら動きが変わって、面白かった」といった関係性が明確にとらえられるような発言を引き出す指導が求められる。

□ 第1学年「あきとなかよし」の授業から⁽³⁾

この授業では「木の実や葉などを使って自分なりの遊びを工夫したり楽しんだりすることができる」というねらいを設定している。さらに、本時の指導案の評価の観点には「自然の材料の特質を生かしているか」との記述があり、地域の自然とのかかわりや自然の素材を使うことによって自然に親しむとともにそれらの特徴に気付くことをねらっている。そのためには、ドングリの大きさや形の比較、紅葉した木の葉の美しさとともに採集

した場所や樹木の様子なども指導のポイントとなる。

この学習は、3年「身近な自然の観察，昆虫と植物」 4年「季節と生物」 5年「天気の変化」 6年「生物と環境」 中1「生物の観察」などにつながる学習内容である。生活科で体験した生き物や植物へのかかわりや思い・願いが理科の学習とつながり、科学的な見方や考え方を深める。体験したことは子どもの心に残り、体にしみ込んでいるからである。その際、中学年以降の教師は理科の授業において子どもに生活科で学んだ自然とのかかわり等についての経験を尋ね、生かすことに努めたいものである。

㊦ 教材研究の視点に科学的な見方や考え方を

教材研究を行う際に、これまで述べてきたような科学的な見方や考え方についての視点をもつようにする。理科では教材研究における予備実験は必須の条件である。生活科においても例えば、おもちゃを作り、ゴムの太さや伸ばす長さなどについて試してみることにより、気付きの質を高める指導・助言が可能となる。また、地域の公園に出かけてどのような種類のドングリを見付けることができるか、コマを作るためにふさわしいドングリを選ぶにはどうすればよいか等の視点をもって教材研究に取り組みたいものである。

このような取り組みが適切な発問を生み、活動への指導・助言を明確なものにする。そして、自然の見方や考え方を深める。教材研究の視点に「自然の不思議さや面白さを実感する」ためにどのよ

うな内容や活動を構成するかを考える必要がある。

㊧ 「つなげる」

生活科では人とのかかわりを大切にすることから友達のよさや自分との違いなどに目を向けることが多く、まとめもそうした観点が中心になりがちである。友達と仲良く活動した、工夫して作った、などの相互評価に加えて、どのように自然の材料の特徴を生かしたか、などの科学的な見方や考え方につながる評価の視点も加えたいものである。

また、必要なことを調べ、追究する問題解決の学習や考えたことを話し合ったり文章や絵などに表現したりする学習は、総合的な学習の時間や他の教科等の学習につながるものである。学習の質を高め、学ぶことの意味と価値に子ども自身が気付くことは、学ぶ意欲を高めることにつながっていく。教師は、こうした子どもの内面の成長を導く指導を繰り返し、粘り強く行っていく。

生活科で学んだことが、3年生以降の各教科や総合的な学習の時間で新たな意味をもつことを期待したい。その上で、教師は、なぜこの学習をするのか、子どもにとっての意味や価値は何なのか、なぜ科学的な見方や考え方の育成が求められているのか、などについて問い続けていきたいものである。

- (1) 学習指導要領解説生活編（文部科学省）
- (2) 練馬区生活・総合部会における練馬区立高松小学校2年 坂田聡子先生の実践から
- (3) 日野市立七生緑小学校校内研究1年 村野井広美先生の実践から

地域から学び、地域とつながる総合的な

岩手大学教育学部准教授
田代 高章

■ はじめに

平成20(2008)年の小・中学校の学習指導要領告示では、総合的な学習の時間は、改訂前と比較して週一コマ程度、配当時間が減らされた。しかし、これは、総合的な学習でこれまで想定されていた知識・技能を活用する学習活動が、各教科の時間で充実されるべきことを踏まえたための措置であり、「生きる力」を育むための総合的な学習自体の重要性については変わらない。

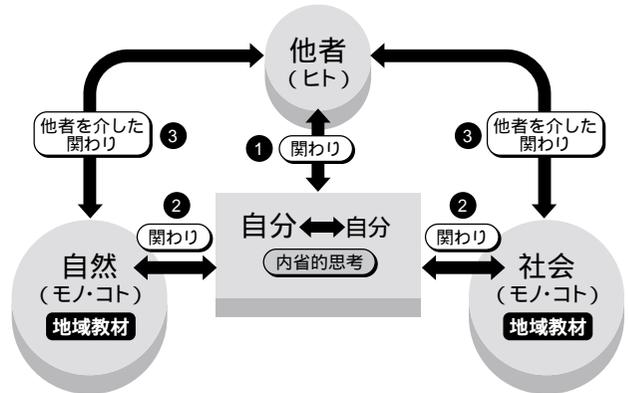
このような状況の中で、生活科・総合的な学習を今後いかに発展させていくかが課題となる。ここでは、特に地域とのつながりを中心に、総合的な学習で地域素材を生かすことの意義と、それを踏まえた実践例を紹介する。

□ 地域学習を中心に据える意味

生活科や総合的な学習は、カリキュラム論的には、いわゆる経験主義のカリキュラムに属する。アメリカの教育哲学者ジョン・デューイの主張にうかがえるように、そこでは、何よりも子どもたちの身のまわりの経験が重視される。教育内容としては、子どもたちの生活と関連する題材や具体的な地域の素材が重視され、教育方法としては、何よりも直接体験や活動を通じた問題解決的な学習が重視されるのである。

その中には、地域素材を中心とした探究的な直接体験や活動を組織することも含まれる。地域を中心に体験や活動を組織することの意義は、子どもたちにとって、何よりも身のまわりの地域素材こそが、直接に五感でふれやすいこと、具体的にイメージしやすいこと、リアリティとしての実感、それらから誘発される興味・関心などをもちやすいことなどにある。まさに、地域の素材は生活科・総合的な学習

関わりを通じた「学び」の構造



にとっての学びの宝庫なのである。

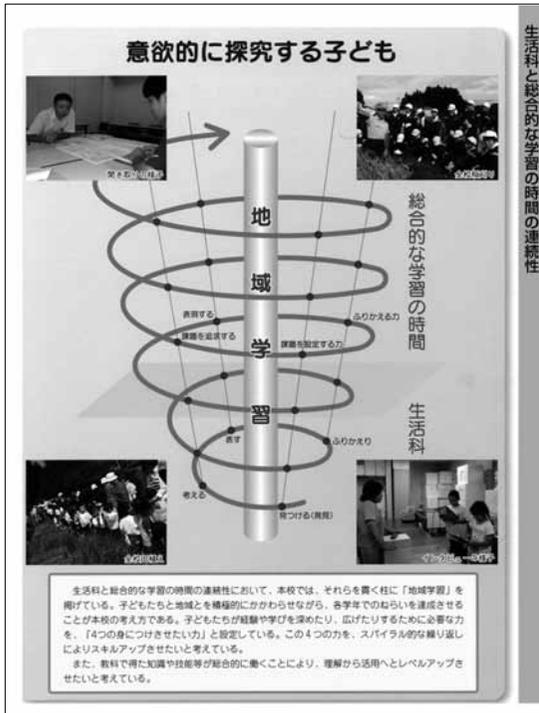
つまり、インターネットや文献資料だけでは学べない、直接性・具体性・体験性が保障できるのである。このことは、学習対象を深く理解することに多大な効果を有する。

また、地域素材を中心に学ぶことは、地域の自然・社会だけではなく、必然的に、地域の人々との出会い・かかわりをもたらす。身近な地域の人々とかかわることにより、子どもたちのみならず教師にとっても自分だけでは知り得ない地域のさまざまな情報を得られる機会にもなる。また、多様な人々との出会いとかかわりは、人とかかわり方や他者の生き方にもふれ、人間形成としての機能も併せもつ。さらに、地域の方々も、生活科や総合的な学習を通して、自分の知見が子どもたちの学習に生かされることにもなり、世代間のつながりと自己充実感を育むことにもなる。ひいては、学校と地域との密接なかかわりが生まれ、地域で学校を支えようという意識や地域自体の活性化にもつながる。

□ 地域学習としての総合的な学習の事例： 盛岡市立生出小学校

地域の素材を重視し、かつ地域の課題を中心に生活科・総合的な学習の展開を構想している学校の一

学習の展開



身近でありながら意外に知らないことが多い。生活科や総合的な学習では、地域こそが、生きた教材になるという考えのもとに、特に、地域の自然、産業、文化、歴史、および、そこに住む人々と「かかわる」ことを重視している。地域を学び、地域から学び、さらに、よりグローバルな課題へと広げて探究しつつ、自己の生き方や社会のあり方を考え、地域に発信する総合的な学習である。

生活科と総合を一貫させたカリキュラム

生出小学校では、総合的な学習の全体構想は、生活科との関連も含めて、地域学習を核に、体系的に展開されている。生活科では学習指導要領に示された内容はもちろん、特に、総合的な学習の土台として、徹底的に地域を歩き、地域に即して自然・社会・人々とかかわる活動を展開している。

地域での直接体験や活動で確認・分析・整理

生出小学校では、インターネットや文献資料などの間接情報だけではなく、特に、地域に出かけて実

つに、岩手県盛岡市立生出小学校がある。盛岡市郊外の玉山区にあり、西に岩手山、東に石川啄木の歌にも詠まれた姫神山があり、その両山のあいだに位置する、全校児童数60名弱の小規模の小学校である。現在、私が岩手大学教育学部の学生10名程度を引率し、生活科・総合的な学習の支援に入っている学校でもある。

この生出地区は、自然豊かであるが、戦後の開拓入植とその後の農地改良・用水路敷設など、東北ならではの厳しい土地での暮らしを切り拓いてきた開拓の歴史を背負っている。

生出小学校の、地域学習としての総合的な学習の特色を以下に整理してみる。

地域学習や地域課題を中心に据える

地域の自然・社会・人々について、子どもたちは、

地域課題の研究活動場面



地域交流施設：ユートランド姫神の施設についての聞き取り調査の様子（産直野菜販売、そば、豆腐等体験工房）

地域課題の研究活動場面

地域の方への戦後の開拓入植についての聞き取り調査



玉山総合事務所での水質についての聞き取り調査

際に確認したり、地域の関係する方々に直接聞き取りを行ったりする活動を重視している。学生からの支援もあるが、そこでの内容が専門的に深まった場合には、研究機関や施設や役場等を訪れ専門家への聞き取りも欠かさない。近年の総合的な学習が、インターネットの情報のみを無批判的に鵜呑みにして、場合によっては、そこでの情報をコピー＆ペーストして情報探究を終えて整理したというような活動さえあると聞かなかでは、直接情報を収集し、分



施設での発表会の様子

析し、整理するという学習こそが本来の探究活動である。

地域からグローバルにつながる 視点で、いかに行動できるかを想定

生出小学校では、学んだことが、自分たちのものの見方や考え方の変化、自分の生き方はどういう意味をもつかを考えさせることを重視する。また、それにとどまらず、可能な限り、自分たちに何が行動できるかを、地域の中で、あるいは、地域を越えた社会全体において考えさせることを重視する。その後の中学校での総合的な学習や人間としての生き方の確立につながるようにとの配慮である。

学習の情報収集・分析の成果を、 発表会等で地域に還元

生活科・総合的な学習の成果は、中間発表、最終発表会など、区切りの良いところで、発表会をもち、必ず他の学年の子どもたちも参観し、質疑や意見を受け付ける。年度末の発表会は、地域の交流施設のホールで、他学年や保護者だけでなく、地域の方々や、お世話になった専門家の方々も招いて発表し、参加した方々の意見も求める。その成果は、冊子化し、地域にも配布し、学校にも保存して、他学年の子どもたちが閲覧できるようにしている。また、生活科・総合的な学習について、見やすく解説したりフレッツを作成し、保護者はもちろん、地域の方々にも配布して、地域の方々への幅広い理解・協力を得られるよう努めている。

教員の事前の 地域フィールドワークを実施

教員は必ずしもその校区の出身者ではないため、少しでも地域学習のイメージを豊かにもてるよう、年度当初、教職員だけで、実際に聞き取りも含めて地域を歩く、フィールドワークを実施している。教職員が地域のすべてを必ずしも把握する必要はない

地域から学び、地域とつながる総合的な学習の展開



養鶏場での聞き取り調査



用水路の実地観察の様子

かわりをもった地域の方々に発表会で発信することで、あらたな情報やアドバイスをもらえ、世代を超えた交流につながる。

子どもの学力形成と人間形成に向けての、学校と家庭・地域の三者の協力・連携が、生活科・総合的な学習を通じて無理なく実現できている。

❏ おわりに

生活科や総合的な学習は、もちろん、単に地域の問題だけを狭く扱う学習時間ではない。しかし、これからの将来を見据えて、子どもたちの「生きる力」をはぐくむためには、地域から国、さらに世界との関連において、広く物事の意味を理解し、それを自分の生き方や他者とのかかわりにおいて、とらえ直し、主体的に行動できる人間へと成長させる手だてが必要となる。そのためには、地域から出発しながらグローバルな視点で、自然や社会の事象や人々を見つめ直し、自らの行動や自分たちが生きる地域や社会を創造しうるための総合的な力が求められているのである。

そのような観点から、まずは出発点としての、地域から学び、地域とつながる総合的な学習を展開することの意義は大きいと思われる。



「生活科・総合的な学習」のリーフレット



岩洞第一発電所での聞き取り調査

ともいえる。しかし、教職員が積極的に地域に出て活動することは、実際に話をし交流した地域の方々の、地域をしっかりと見ようとしてくれている、地域を大切にしてくれているという思いに通じ、教職員と地域の方々との人間的な信頼関係構築の大きな基礎にもなっている。

地域の人々とのかかわりを重視

地域の人々とのかかわりは、子どもにとっても教師にとっても地域学習の大きな財産となる。地域の方々には、その知見を地域の子どもたちに生かせる機会となり、子どもたちは地域学習での成果を、か

「水」の総合学習から生まれた新しい学力

知識活用能力(リテラシー)を伸ばす授業の工夫

神奈川県相模原市立鶴の台小学校長
(前相模原市立宮上小学校長)

金山 光一

■ はじめに

新学習指導要領の重点の学力である知識活用能力(リテラシー)を伸ばすことは容易ではない。しかし、これまでの総合学習を一度だけの体験だけでなく問題解決の授業にしっかり結びつけば知識活用能力を伸ばすことができるはずである。新学習指導要領が答申される前の平成18年、19年、20年相模原市立宮上小学校では環境問題として「水」を総合学習で徹底的に取り組み、この学力を伸ばすことができた。

神奈川県相模原市北部にある宮上小学校では平成2年より総合、生活科の研究に取り組み、学校の裏のゴミで汚れた境川を地域と一体となってきれいにした。平成13年日本生活科・総合的学習教育学会全国大会が宮上小学校で開かれ、総合の先進校として発表した。さらに私が赴任した2年目の平成18年には日本石けん業界の主催する「地球ピカピカ大賞」を受賞した。このように総合、生活科の研究の取り組みは18年間にわたり、宮上小学校の教育の特色そのものである。

■ 「水」の総合学習の指導計画

平成18年、山間部の津久井地区との合併により新相模原市は自然豊かな都市になった。私は水を中心とした環境学習を進める絶好の機会であるととらえ、自然体験や水源地の子どもとの交流を考えた。しかし、新しい取り組みなので具体化する中で解決しなければならない課題も多く出てくる。そこで、年度初めの人事でその推進役として環境教育に意欲的な職員を配置した。さらに総合的に学力を伸ばすためと時間の確保のために教科横断なカリキュラムを編成した。

3年生では境川の上流、中流、下流を体験した。

平成18年度 3年生(地域の川・境川の総合学習)

- 4月 地域ボランティアと花壇整備(道徳、国語)
- 5月 生物観察と清掃活動(理科、道徳、国語)
- 6月 新相模原市の学習(社会)
- 7月 専門家と水生生物観察(理科)
- 9月 山間部の青根小学校訪問(校外学習、国語)
子供交流と相模川水源地の探検(理科、社会)
- 11月 保護者を招いた総合の発表会(社会、理科、国語)
境川河口の江ノ島探検(理科、社会、国語)
- 12月 境川源流の大地沢探検(理科、社会、国語)
- 2月 横浜青少年ホールで発表(音楽、国語)
- 3月 休日に子どもたちだけで自主的にゴミ拾い(道徳)
美化ポスター作成



その体験をもとに合併によって同じ市内になった山間部の青根小学校と交流し、津久井の自然と人のすばらしさを学んだ。子どもは、食べられる魚が住んでいる相模川上流の水のきれいさに驚き、境川をもっときれいにしたいと考え、休日にゴミ拾いをはじめた。

平成19年度 4年生(水源の川・相模川の総合学習)

- 4月 水源のダムや浄水場を見学(社会、国語)
- 5月 水道局の人から水道の学習(社会、国語)
ポートフォリオ「どうすれば水がきれいになるか」
- 7月 話し合い「節水しよう」
2回目の青根小訪問・子供交流(校外学習)
相模川水源地で湧水を飲料(社会、理科、国語)
- 9月 相模川河口で地引き網体験(社会、理科、国語、遠足)
下水処理場を見学(社会、理科)
下水道局から水浄化の学習

10月 連合音楽会で市内の子どもに研究成果を発表



- 11月 総合発表会に青根小の児童・保護者を招待
- 2月 地域のホールで保護者に向け研究成果を発表
- 3月 デザインコンテストで多くの児童が入賞

4年生では3年生で学んだことをもとに相模川の学習を進め、水の大切さを学んだ。子どもは相模川水源林の生まれただけの冷たい美味しい水を飲み、相模川の河口での地引き網を体験し、山と海が川でつながっていることを学んだ。



④ 読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーを育てる授業

これまでの体験学習は価値はあったが一時的で、前後の授業との関連が薄いものが多かった。そこで育てたい力を明確にしながら、教室での事前・事後の授業を綿密に計画した。

平成20年1月の中央教育審議会で思考力・判断力・表現力の育成の意味について答申が行われている。それによるとPISA調査の読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの評価を参考にすると各教科において次のような学習活動が重要だと述べられている。

- 体験から感じ取ったことを表現する。(体験・表現)
- 事実を正確に理解し伝達する。(理解・伝達)
- 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。(解釈・活用)
- 情報を分析し・評価・論述する。(分析・評価)

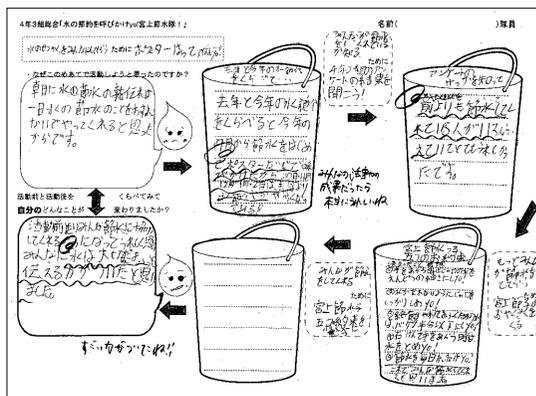
課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。
(構想・実践)

互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを
発展させる。(思考・発展)

次に宮上小での総合学習の授業を ~ の学習活動にあてはめてみた。

(1) ポートフォリオを活用する授業 (構想・実践)

「児童が学習の見通しを立て、学習したことを振り返ることが重要である」と学習指導要領で述べられている。次のポートフォリオは4年3組遠藤学級「水の大切さを訴える」である。子どもたちが水を大切にしていける過程がしっかりと読み取れる。



单元名「水の節約を呼びかける宮上節水隊」

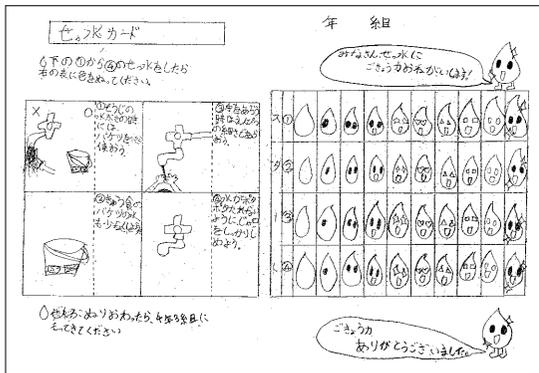
それぞれの子どもが課題を設定し、それをどのように学んでいくかの筋道を立てることは学習を進めたり、深めたりする上で大変重要である。このポートフォリオを活用することにより子どもの課題意識が明確になり、また、教師にとっても子どもの思考過程を知ることが出来るようになり、適切なアドバイスを与えることができた。

(2) 情報を評価・分析する授業

(理解・伝達)(分析・評価)

節水を自分たちだけでなく、より多くの人に協力を呼びかけることを授業の中で話し合う。次のポス

ターは子どもたちのアイデアから生まれた節水カードである。節水の具体的な目標が示されていて、また、グラフも水滴の数で示し、節水した量がイメージしやすい工夫がなされている。子どもは朝自習の始まる前に手分けして全クラスをまわり、節水を呼びかけた。



子どもたちのアイデアから生まれた「節水カード」

(3) 総合学習の中の数学的リテラシーの授業

(分析・評価)(思考・発展)

下の図は子どもがかいた宮上小学校の水道使用量を示した表である。子どもはこの数字を見て全校の児童に節水を訴えたから昨年に比べ水道使用量が減ってきたと考えた。また、この数字がどのように変化しているのかを見るためにグラフをかいた。そしてグラフの変化を見て、何がわかるかを確かめようとした。これは数学の基礎知識を活用して課題解決



に取り組んだ様子である。さらにこれらの表やグラフから水道代金が少なくなっていることに対し、節水に協力してくれた全校の児童にポスターや漫画やビデオなどでお礼をしようと話し合った。

(4) PISA型の思考力を伸ばす授業

(解釈・活用)(思考・発展)

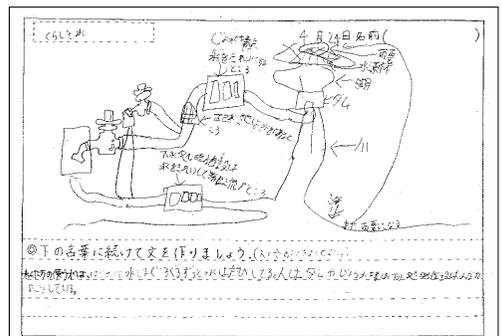
物事を多面的に捉え、論理的に説明することがPISAの問題を解く鍵である。このグラフを見て、本当に自分たちの節水の呼びかけにより、水道代金が安くなったのかを疑う子どもがいた。天気が悪くて水の使用量が減ったとか、水道料金そのものが安くなったからなどの理由からである。他の子どももその意見に賛同し、どうすれば自分たちの節水の努力が明らかになるか調べてみようかと話し合った。そして、「水を大切に思ったか」「毎日節水しているか」のアンケートを採った。その結果、子どもは自分たちの呼びかけが節水に大きな役割をはたしたと結論づけて満足した。

この意見を授業の課題として取り上げた教師は、ポートフォリオの中の子どもの小さなつばやきを逃していない。普通だったら、時間がなくて削ってしまうような考えをしっかりと取り上げた。PISA型の思考とは論拠を確実につかみ、さまざまな場面を想定しながら自分の意見をもつことにある。したがって、この授業の中で子どもはPISA型の思考力を伸ばすことが出来た。

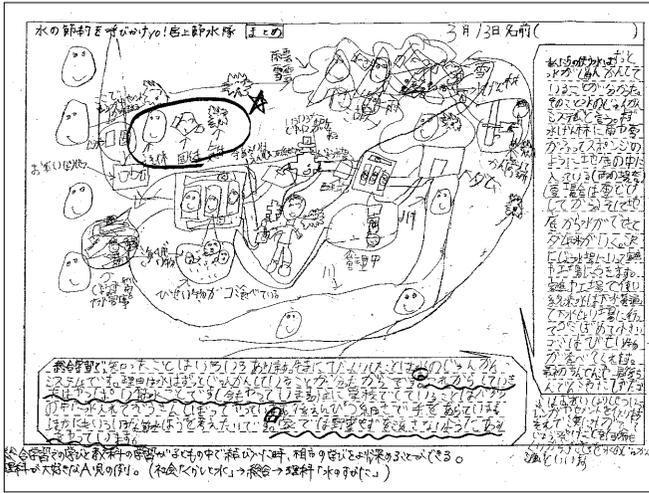
(5) 表現力を飛躍的に向上させた体験活動

(体験・表現)(理解・伝達)

下の図はA君が4月にダムと浄水場を見学して書いた図である。わかったことを書く欄も1行程度であった。A君はおとなしくて、自分からほとんど発言しない子どもであったが理科が好きだった。



「水」の総合学習から生まれた新しい学力



上の図は同じA君が翌年2月、学年のまとめに書いた図と言葉である。水が水源から生まれて、水道、下水道、下水処理場を経由して濾過されて、海にいたるまでを詳しく書いている。また、水が液体(雨)、固体(雪)、気体(水蒸気)に分かれて、地球を循環している様子がわかりやすく書かれている。さらに、この図の中に自分の姿が描かれていて、実際に水を使う当事者としての意識が見て取れる。

この一年間でA君の水に対する意識は山から生まれた一滴の水を飲むことから始まり、海での地引き網までを体験をすることによって大きく変わってきた。本に書いてあった写真や文字が頭の中で立体の映像になって写っているのであろう。

さらにこの図の右に書かれている文章は次のよう

私たちの使う水はずっと水が循環していることがわかった。そのことを水の循環システムという。まず水源林に雨や雪が降ってスポンジのように地底の中に入っている。(雨の場合)(雪の場合は雪解けしてから)。そして地底から水が出てきてダムに水が行く。次に浄水場に行き、家庭や工場で使い終わった水は下水管を通して、下水処理場に行ったゴミを洗って小さいゴミは微生物が食べてくれます。最初、沈殿池、最後沈殿池に沈めたゴミは汚泥処理場に行き、煉瓦、セメントを作ります。それで海に水が出て、蒸発したことを何回も繰り返すことを水の循環システムといいます。

である。

この文章はシンプルでわかりやすい表現で書かれている。「スポンジのように地底に入っている」は実際に水源地に行ったからこそできる表現である。一つ一つの言葉に重みがあり、伝えようとする思いが感じられる。山の一滴の水が海に注ぐまでを体感することによりA君は大変深い学びができた。実体験により、旺盛な知識欲が生まれ、さらに豊かな表現力へとつながっていった。

ほとんど1行しか書けなかった子どもが体験することによって、自分の思いをしっかりと表現できるようになった。また、内容もしっかりとした説明文を書けるようになった。特定の子どものだけでなく、ほとんどの子どもの表現力が向上している。体験活動の充実はまさに言語活動の充実につながった。

まとめ

23年度より完全実施される新学習指導要領では総合学習の時間が週2時間に減る。これを機にさらに総合学習を充実させていかなければいけないのだが、軽視しようとする動きが出てくるであろう。しかし、これまでの実践から、総合学習は新学習指導要領の求める知識活用能力(リテラシー)を伸ばすことに大変有効であると確信した。

[参考資料等]

- 平成18, 19, 20年度 宮上小学校(澤田俊子教諭, 遠藤悠子教諭, 細野経教諭, 奥田加奈教諭)の授業より
- 津久井相模原子ども交流プロジェクト 金山 光一
- 平成19年度 教育実践研究論文集 相模原市立総合学習センター p65-78
- 津久井での自然体験から生まれた新しい学力 金山 光一
- 平成20年度 相模原市立公立小学校校長会 特別課題研究部編 p26-34
- 平成20年度関東地区生活科・総合的な学習研究協議会神奈川大会発表資料
- (金山光一, 遠藤悠子教諭, 細野経教諭, 奥田加奈教諭)
- 中央教育審議会「答申」平成20年1月17日
- 森からの贈り物・森林再生授業促進実行委員会編

はじめまして 新しい教科書です



教科書のコンセプト



あたりまえのようで難しい、3つの課題に挑戦しました。

① わかりやすく、すっきりした教科書

② ねらいを、はっきり示した教科書

③ カが、しっかりつく教科書

① こんな“すっきり”工夫をしました

全ての児童たちに見えやすいカラーユニバーサルデザインに配慮しています。
紙面をすっきりさせたことで、大切な言葉や活動が読み取りやすくなりました。



上巻：P.4～5



下巻：P.2～3



上巻、下巻の情報量は、児童の発達に合わせています。
例えば、下巻のとびらには副題をつけました。

👉 学びの引き出しが増える「ポケット」

生活科はもちろん，他教科や総合にもつながる生活上必要な習慣や技能にかかわる内容を，巻末にまとめています。



上巻：P.30～31
はると ともだち
（「春の季節と遊び」単元）



上巻：P.85



下巻：P.81

下巻：ぐんぐん まなぶポケット

- ① たんけんの たつ人
- ② き 記ろくの たつ人
- ③ はっぴょうの たつ人
- ④ つたえ方^{かた}の たつ人
- ⑤ のりものの たつ人
- ⑥ あん心^{しん} あんぜんの たつ人
- ⑦ 地きゅうと なかよし
- ⑧ ようこそ 本の 国^{くに}へ
- ⑨ つかい分け^わの たつ人

.....➔
巻末の「ポケット」へ

上巻：ぐんぐん ちからポケット

- ① まほうの ことば
- ② ひろがる ことば
- ③ からだで たんけん
- ④ おぼえて あんしん まもって あんぜん
- ⑤ どうぐの たつじん

3

生活科で育てたい力, “しっかり” つきます

対象への気付きだけではなく、対象と自分とのかかわりや、自分自身へのよさや可能性に気付きながら「気付きの質」が高まるように、活動を工夫しています。

「見つける、比べる、たとえば」など多様な見方で、豊かで柔軟な思考を育てる



大きなカード、具体的な内容、丁寧な文字で、しっかり読み取ることができる。

上巻：P.16～26 おおきく なあれ（「草花栽培」単元）



カードの下には支援の言葉

科学的なものの見方や考え方を育てる

下巻：P.66～67 作って ためして（「おもちゃ制作」単元）



作ったおもちゃで あそぼう ー 計画とおぼえのしんぶん

やった、できあがったよ。
ためして みようよ。

はてん
じつに くつつく ものは
作て てきて いるのか
な。

どう やって
あもしろい
うごきに したの。

もっと 高く
とほしたいな。

ほかに
くつつく ものは
あるのかな。

うまく
ひらかないよ。

じょうぶに
したいな。

うちわで あおくと
どうかな。

あんなて
おもちゃ大盛を
したいな。

もっと
はやく
したいな。

ほを
大きくしよう。



試して、比べて、また試す活動の繰り返し。

友達や先生と

ともに学ぶ喜びを育てる

上巻：P.12～13 みんな ともだち(「学校探検」単元)



園児と



上巻：P.30
はると ともだち
(「春の季節と遊び」単元)



上巻：P.60 あきと ともだち(「秋の季節」単元)

保護者や
地域の人と

学びを伝え合いながら、より高く深い学びへ



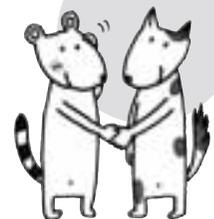
下巻：P.42～43 ハートをつなごう（「まち探検」単元）



（「節と遊び」単元）



上巻：P.84
もうすぐ 2年生
（「成長」単元）



平成23年から、新しい教科書による
新教育課程がスタートします。



地球となかよし

メッセージ 2010

作品募集 (第8回)



「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、
写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。

応募資格

小学生・中学生(数名のグループ単位での応募も可)

作品テーマ

- ①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや、自然環境や生き物を守るための取り組み
- ②さまざまな人との出会いを通して、友好の輪を広げた体験、異文化交流、国際理解に関すること
- ③その他、「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたこと

応募期間

2010年7月1日～9月30日

詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧ください。

応募者全員に
参加賞が
もらえるよ

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね

<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

2009 入選作品



「真っ直ぐ、上へ」

海浜植物の中でも一番海岸線に近いところまで生えている「コウボウムギ」。海岸の、乾燥して風も強く、さらに強い日差しという厳しい自然環境の中でも、地下茎を伸ばしてしっかりと根をはり、生きていく。砂に埋もれてもまた上に伸びていくだけでなく、砂浜の砂が流失するの防ぐ役割を果たしている。

夏のある日、コウボウムギの、地下茎から真っ直ぐ地上に伸びる芽を見つけた。最初は何の芽で、どこから生えているのかわからなかったが、それが群落から伸びている「新しい命の始まり」であることがわかり、その力強さに驚いたと同時に、砂浜では小さな存在だけど、その大きな役割に感動した。

◎主催 / 教育出版 ◎協賛 / 日本環境教育学会

◎後援 / 環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学校新聞

*こどもエコクラブのパートナーシッププログラムです。

*協賛・後援団体は昨年実績で、継続申請中です。



教育出版

「地球となかよし」事務局

TEL 03-3238-6982 FAX 03-3238-6975

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-10

生活科・総合通信 そよかぜ通信 [2010年 春号] 2010年3月31日 発行

編集 : 教育出版株式会社編集局

発行 : 教育出版株式会社 代表者 : 小林一光

印刷 : 大日本印刷株式会社

発行所 : 教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6862 (お問い合わせ)

URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp> E-mail edit-info@kyoiku-shuppan.co.jp



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社 〒060-0003 札幌市中央区北三條西3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509

函館営業所 〒040-0011 函館市本町6-7 函館第一生命ビルディング3F
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198

東北支社 〒980-0014 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395

中部支社 〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル 5F
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825

関西支社 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル 7F
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401

中国支社 〒730-0051 広島市中区大手町3-7-2 あいおい損保広島ビル 5F
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040

四国支社 〒790-0004 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル 5F
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134

九州支社 〒810-0001 福岡市中央区天神2-8-49 福岡富士ビル 8F
TEL: 092-781-2861 FAX: 092-781-2863

沖縄営業所 〒901-0155 那覇市金城3-8-9 一粒ビル 3F
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411